十日町市下原田 A 遺跡発見の陥し穴跡

Trap-pit from Shimoharada A site in Tokamachi City

阿部　敬 [1]

ABE Satoshi

（2025 年３月７日受付；2025 年３月 10 日受理）

陥し穴跡は縄文時代の狩猟行動について具体的に知ることができる重要な資料である。日本全国に見られ、特に東日本においてはおびただしい数が発見されている。本稿では令和５年度に発掘調査された十日町市下原田 A 遺跡で発見された溝型の陥し穴跡について報告するとともに、これまで発見された市内の陥し穴跡を集成して検討した。その結果、十日町市内では８遺跡で縄文時代と推測される陥し穴跡が発見されており、うち６遺跡で溝型が検出されていることがわかった。一部には列配置や組配置が認められる。また帰属時期の推定できる陥し穴跡は溝型で、縄文時代中期以降に帰属するものであることを確認した。

はじめに

縄文時代の陥し穴跡は全国的に存在し、特に北海道や東北地方北部に多いことが知られている。関東地方で総合的な研究の深化が図られ（今村 1976・1983 ほか、宮沢・今井 1976、中村 1998、佐藤 1989・1998、金持 2012 等）、北海道（藤原 2013・2018 ほか）、東北地方北部（田村 1987、坂本・杉野森 1997 等）、九州（富永 1989、高橋 1994 等）、中国地方および石川・富山県（稲田 1993、足立 2016）については悉皆的な集成に基づく検討が行われてきた。新潟県においても地域的な検討が認められる（山﨑 2000、小池 2002）。十日町市においては本報告された事例が１件のほかに市史の記述があるものの、集成や具体的な検討は行われてなく、現状では個別の詳細な報告の蓄積が将来の研究にとって意義をもつと考えられる。本稿では新潟県十日町市の信濃川右岸段丘上で令和５年度に発掘調査された下原田 A 遺跡出土の縄文時代の陥し穴跡について報告し、今後期待される諸研究の一助としたい。

１　下原田 A 遺跡

（１）調査概要

下原田 A（しもはらだえー）遺跡は新潟県十日町市川治 4562 番ほかに所在し（図 1）、信濃川中流域右岸の十日町面と古期段丘に挟まれた扇状地･崖錐堆積物上（信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2003）に立地する（図 5）。標高は約 165m である。十日町盆地の中央を北流する信濃川の支流、川治川（かわじがわ）と南の羽根川（はねがわ）に挟まれている。十日町面の離水年代は縄文時代早期後半から前期頃とみられることか

図１　下原田 A 遺跡（令和５年度調査区）の位置

1　十日町市博物館　〒 948-0072　新潟県十日町市西本町一丁目 448 番地９

ら、本遺跡についても早期前半には遡らない可能性が高い。

本遺跡は土地改良事業に伴う試掘調査により平成 22 年度に発見され（十日町市教育委員会編 2011）、平成 23 年度に本調査が行われた（十日町市教育委員会編 2012）。調査の結果、土坑５基と縄文時代中期の土器片および打製石斧などが発見されたが、報告書が刊行されてなく調査範囲をはじめ土坑の性格なども明らかではない。

令和５年度に集合住宅建設に伴う確認調査により平成 23 年度調査区の南に隣接する範囲で発掘調査が行われた（図 1･2）。東西に伸びる５つのトレンチ（T1 ～ 4。トレンチ４は東西に分割。）を重機掘削し、人力で壁面および床面の精査を行い、結果として陥し穴跡３基（001 ～ 003SK）発見された。遺物は縄文のものと推測される土器、石器（いずれも細片）と、時期不明の陶器が数点出土した。

本遺跡の基本土層は１層：表土（耕作土）、２層：黒褐色極細粒砂、３層：褐色極細粒砂、４層暗褐色極細粒砂、６層：暗褐色細粒砂、７層：にぶい案黄褐色極細粒砂、８層：黄褐色細粒砂、９層：にぶい案黄褐色細粒砂である。土器と石器は２層から出土し、僅少ながらこの層が包含層と見られる。

陥し穴は３層上面を検出面として３基発見された。平成 23 年度調査の成果からみて縄文時代に帰属する可能性があるが、数の少なさも手伝ってその配列に規則性を見出せないことや遺物も極めて少ないことから本調査には至らなかった。確認調査報告書（十日町市教育委員会編 2023）では紙数の関係から遺構配置と写真の掲載にとどまっていた。

（２）陥し穴跡（図３・４）

ア）001SK

調査区南半の T4 西端で壁面の精査中に発見された。掘り込み面は包含層中とみられ、深さは当時に近い状態を復元していると推測される。長軸 3.62m、最大幅 0.35m、深さ 1.02m で溝型を呈する。底面両端が開口部よりも奥へ入り込む形状である。底部に小土坑は認められなかっ

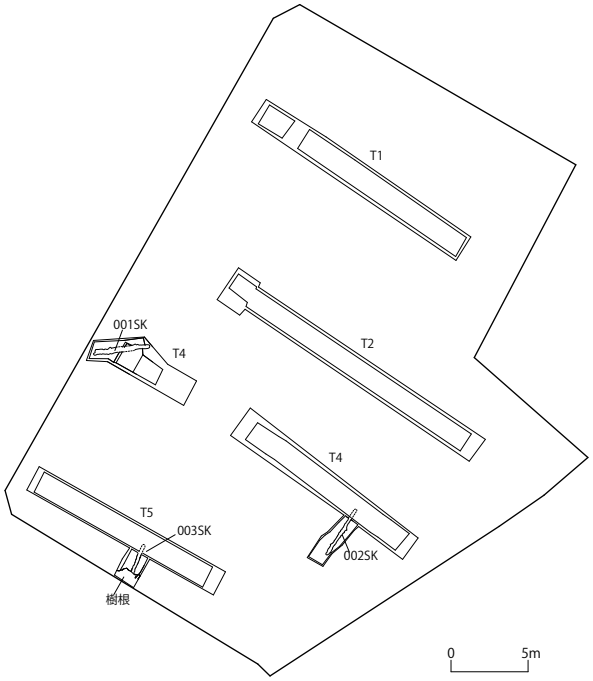


図２　下原田 A 遺跡（平成 23 年度）の遺構配置

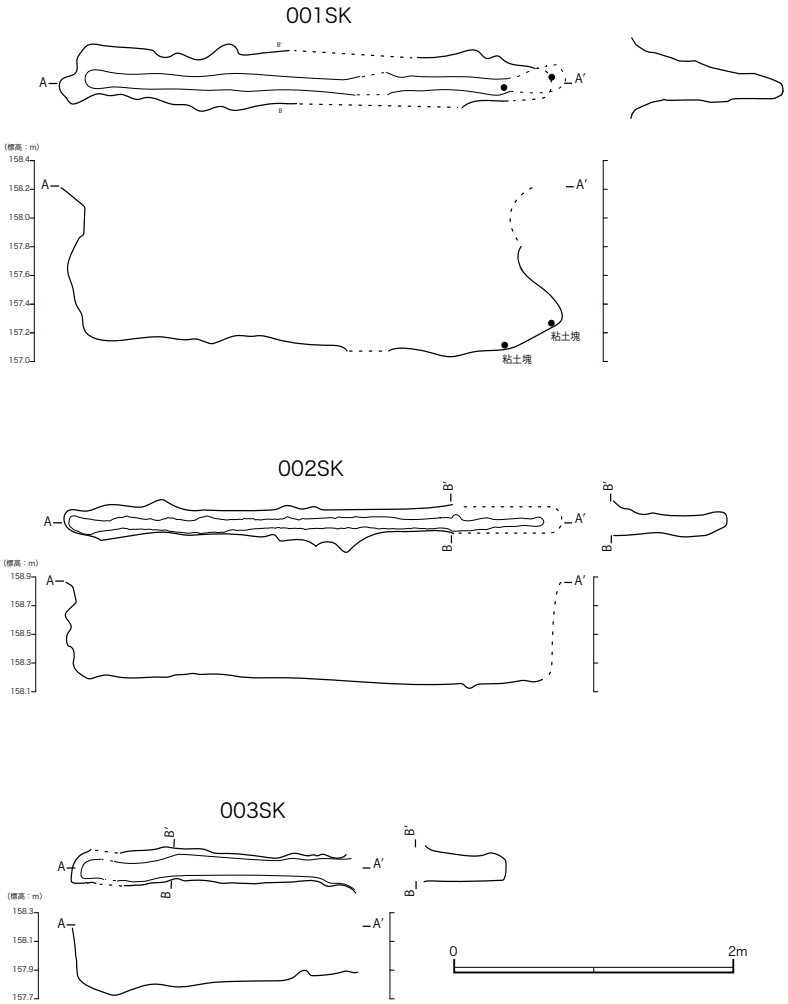


図３　下原田 A 遺跡（平成 23 年度）の陥し穴跡

001SK

002SK

003SK

図４　下原田Ａ遺跡の陥し穴跡

た。

中央付近を重機のトレンチ掘削によって切り取られたため一部が不明だが、底部を含む下部３分の１程度が残されたため、１基の遺構として捉えられる。東側は側面が内湾しており、測量前に崩落したため、図は写真から復元したものである。なお底部ないしこの直上から粘土塊が２点出土した。本遺跡では異質な存在であり注意深く取り上げたが、分析等は行なっていない。

イ）002SK

T4 の東側で壁面の精査中に発見された。長さ 3.63m、最大幅 0.31m、深さ 77m で溝型を呈する。底部に小土坑は認められなかった。重機掘削のトレンチに３分の１ほどを切り取られた状態で発見されたが、遺構底面がトレンチ底面に残っていたことでおおよその全長を捉えることができた。ただし上端は耕作により削平されており、掘り込み面は失われていると考えられる。残された南端の壁面はなだらかではなく、ボコボコしており、当時の掘削痕跡と思われた。遺物は出土しなかった。

ウ）003SK

T5 の中央付近で壁面の精査中に発見された。長さ 2.06m、最大幅 0.26m、深さ 0.45m で溝型を呈する。底部に小土坑は認められなかった。南北に伸びるうちの南端部は樹根によると思われる撹乱を受けており全長は不明である。また、耕作により上部を大きく削平されているため、深さについても復元していないと推測される。遺物は出土しなかった。

２　十日町市内の陥し穴跡

十日町市内の類例について、既存の発掘調査報告書（十日町市教育委員会編 2020）、『十日町市史 資料編 考古２』（十日町市史編さん委員会編 1996）、十日町市博物館リーフレット（十日町市博物館編 2014）をもとに集成した（表 1）。この結果、大井久保遺跡で円形１基（同編 1996）、赤羽根遺跡（同編 1996、十日町市博物館編 2014）で円形または楕円形５基、椿池遺跡で楕円形 14 基と溝型２基（同編 1996）、苧島小原遺跡で溝型１基（十日町市教育委員会編 2020）、つつじ原Ｂ遺跡で溝型２基（同編 1979、十日町市史編さん委員会編 1996）、大清水遺跡で溝型４基（同編 1996）の報告ないし記述があることがわかった。合計 33 基である。これらのほかに天池Ｂ遺跡でも溝型が発見されたとの記述があるが、形状や数量は不明だった（同編 1996：p.621）。全体として溝型は 13 基、比率では４割程度であるが、溝型が検出される遺跡の比率は８遺跡中６遺跡であり７割以上である。

遺跡の分布（図 3）をみると、多くは高位段丘に位置しており、現状では下原田Ａ遺跡のような低位の立地は珍しいようである。

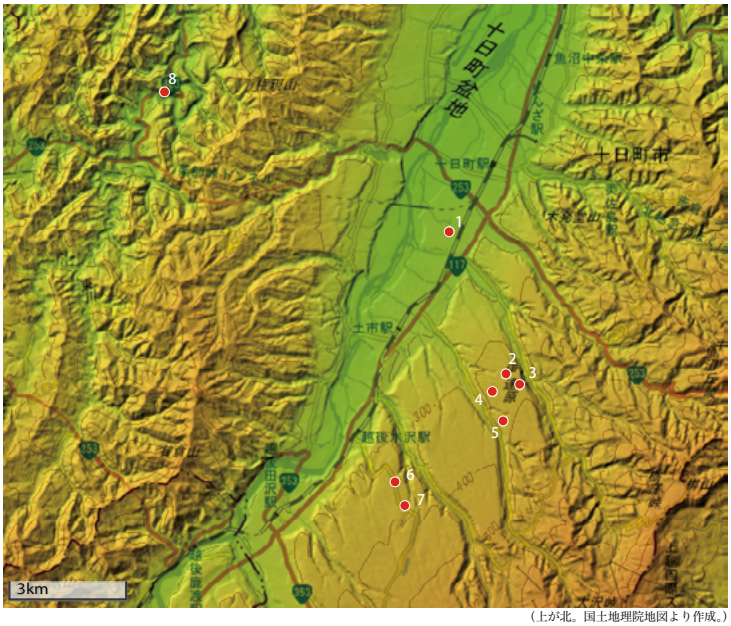
陥し穴跡は通常、遺物を伴うことは稀であり、上記の

遺跡でも同様の傾向が認められるが、時期のわかる遺構との切り合い関係（重複の順序）により帰属時期を推定できることがある。上記遺跡においては、つつじ原Ｂ遺跡の陥し穴が中期末葉の沖ノ原式土器期の第５号竪穴住居跡を切っている例と、中期前葉の土器が出土した第４号竪穴住居跡を切っている例が認められた。それぞれ切られた住居跡の時期よりものちの時期に帰属する可能性が高い。どちらの陥し穴跡も溝型である。特定の形状が特定の時期にのみ帰属するとは言えないが、参考になるだろう。

配置については、赤羽根遺跡では円形ないし楕円形陥し穴の組配置、椿池遺跡では長方形陥し穴の列配置が２ないし３列認められた。既存研究で確認されている陥し穴跡の形態および配置のバリエーションの範疇にあると考えられる。

表１　十日町市内の陥し穴跡

遺跡	所在地	調査年	報告上の名称	形態	底部小土坑数
下原田A	谷地丑	2023	001SK	溝型	-
下原田A	谷地丑	2023	002SK	溝型	-
下原田A	谷地丑	2023	003SK	溝型	-
赤羽根	伊達	1983・1984	第1号陥し穴	円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第2号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第3号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第4号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第5号陥し穴	円形	1
つつじ原B	伊達	1976	陥し穴	溝型	-
つつじ原B	伊達	1976	撹乱	溝型	-
大清水	伊達	1989	第1号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第2号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第3号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第4号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第1号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第2号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第3号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第4号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第5号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第6号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第7号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第8号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第9号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第10号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第11号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第12号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第13号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第14号陥し穴	楕円形	-
椿池	馬場	1991	第15号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第16号陥し穴	長方形	1
大井久保	馬場	1992	陥し穴	長方形ないし楕円形	1
苧島小原	苧島	2020	3号土坑	溝型	-
天池B	伊達	1975・1989	土坑（陥し穴）	溝型	-



（上が北。国土地理院地図より作成。）

1: 下原田 A、2: つつじ原 B、3: 赤羽根、4: 天池 B、 5 : 大清水、6: 椿池、7: 大井久保、8: 苧島小原

図４　十日町市内の陥し穴跡出土遺跡の分布

おわりに

下原田 A 遺跡の陥し穴跡を報告し、あわせて十日町市内の陥し穴跡を集成し、検討を行った。一部の陥し穴跡については帰属時期を推定する手がかりがあることもわかった。陥し穴構築には地域生態に応じた生業の内容、空間利用、時間管理など多くの変数が関わると推測されるため、民族誌モデルの参照とより広域の資料収集および対比が必要である。今後の研究に期待したい。

参考文献

足立拓郎 2016「石川県内の縄文時代陥し穴猟 - 関東地方との比較から -」『北陸史学』65、北陸史学会

藤原秀樹 2013「T ピットについて」『北海道考古学』49、北海道考古学会

藤原秀樹 2018「北海道・北東北の縄文時代前半期の陥し穴」『北海道考古学』54、北海道考古学会

今村啓爾 1976「縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27、物質文化研究会

今村啓爾 1983「陥穴（おとしあな）」『縄文時代の研究』2、雄山閣

稲田孝司 1993「西日本の縄文時代の落し穴猟」『論苑考古学』天山舎

金持健司 2012「多摩ニュータウン遺跡群における陥し穴土坑の形態別出現率」『生産の考古学』同成社

小池義人 2002「妙高山麓の陥し穴土坑について」『小重遺跡』新潟県教育委員会

九州縄文研究会・南九州縄文研究会 編 2004『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』

信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ　2003「信濃川中流域における第四紀末期の河成段丘面編年」『地球科学』57 巻、95-110 頁

宮澤寛・今井康博 1976「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題」『調査研究収録』31、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

宮田栄二 2007「九州地方の陥し穴猟」『縄文時代の考古学』5、同成社

中村信博 1998「溝型陥し穴研究所説」『栃木県考古学

会誌』12
坂本真弓・杉野森淳子 1997「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』2、青森県埋蔵文化財センター
佐藤宏之 1989「陥し穴土坑と縄文時代の陥し穴猟」『多摩ニュータウン遺跡 - 昭和 62 年度 - 第 5 分冊』東京都埋蔵文化財センター
佐藤宏之 1999「陥し穴猟の土俗考古学」『縄文式生活構造』同成社
佐藤宏之 2000『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター
田村壮一 1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要』7
富永直樹 1989「九州のおとし穴状遺構について」『安武地区遺跡群』2、久留米市教育委員会
十日町市博物館 編 2014『縄文前期のムラ 赤羽根遺跡』
十日町市教育委員会 編 1979『つつじ原 B 遺跡』
十日町市教育委員会 編 2011『平成 22 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』
十日町市教育委員会 編 2012『平成 23 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』
十日町市教育委員会 編 2020『林中遺跡発掘調査報告書 林中西遺跡発掘調査報告書 苧島小原遺跡発掘調査報告書 枡形遺跡発掘調査報告書』
十日町市教育委員会 編 2024『令和 5 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』
十日町市史編さん委員会 編 1996『十日町市史 資料編 2 考古』十日町市役所
高橋信武 1994「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』龍田考古学会
山﨑忠良 2000「奥三面地域の陥し穴状土坑」『本道平遺跡』朝日村